

寶生流仕舞謡下

特57

571

075067-000-2

特57-571

寶生流仕舞謡 下

三浦 銀太郎 / 著

M32

CEL-1060



特57
571



三、小、乃、の、里、枝、小、本、傳、の、巻、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、



女系書

多、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

我、書、此、書、の、由、り、

一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ

彼...おぼえなまはしるくかへ
お...おぼえなまはしるくかへ
滑...おぼえなまはしるくかへ
毛...おぼえなまはしるくかへ
同...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ
一...おぼえなまはしるくかへ

大...

四

中枝よ^{ナカエ}る^ミの^{ナカ}たま^ミ あ^ミる^ミも
 あ^ミる^ミも^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ

同切

△新^ニ天^ニ此^ニあ^ミる^ミも^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ

あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ
 あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミの^{ナカ}あ^ミる^ミ

岩くくや其園の戸此敷も明
かく有うたふいあ乃つをさむ
るや名跡なるらこく

安宅切

△
期なるは流れまづ昔日か
毛給まどうたりたをま
きりあきくきやた
うたごころゆふあ
人々あははあ

後をあつる肩よ赤を虎の
尾をふと毒蛇の口ばの
きるを地してむつら
くたりきる

東小名

取九重此東小名雲
てま株の鬼門を守ま
悪魔をまらふ
よと山陰乃加後河や

中世の草紙の事
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

神本
 神本

たまたまふもなきやんを
ひきぬる借りつら二年か
みらぬまのまのまのま

同切

美舞とまのひ 秋と想ふま
妹背は膝まつら綿本
織と細布はまのまのま
くぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
有明は影まのまのま
ゆきまのまのまのまのま

あそ愛人おるまのまのま
綿本も細布もまのまのま
まのまのまのまのまのま
の系世中此境まのまのま
まのま

雲林院名

野二存やまたまのまのま
の秋はあまのまのまのま
新日まのまのまのまのま

いふ事わ我大内よ^{たか}りまふ此
遍昭^まりほくね^まりまの^まあ
様ふあした川さうあわたり
あひ志^まくまもまあひゆくか
は^まる衣^まをまみちか^まら糸
雛のまは^まあ^まりたる^ま誘^まひ
いつ^まやまあ男^まむ^まは^まは^まの
一^まま^まと^ま結^まれ^まあ^まら^まは^まる^まま^まま^まま^ま
る^まま^まさ^まう^ま枝^まの^まひ^まと^まつ^まく^ま信^ま
法^ま政^まや^まま^まは^ま系^まま^まる^ま本^ま絨^ま

色^まれ^ま粘^ま衣^まの^まな^まま^まと^ま冠^まは
巾^ま子^まに^まう^まち^まか^まは^まま^ま思^まひ^まは
る^まや^ま二^ま月^まれ^また^まう^まか^まを^まま^まも^まま^ま
や^まの^まく^まい^まと^ま膨^ま鼓^まよ^まあ^まら
ま^まあ^まら^まお^まつ^まる^まあ^まま^また^まの^まこ
袖^まう^まち^まま^まの^まひ^ま裾^まま^まと^ま黒^ま志^ま
ま^まく^まま^まま^まく^まと^まな^まま^まく^ま
ま^まあ^まの^まひ^まは^ま

同切

舞^まの^ま舞^まの^ま舞^まも^ま時^まは^ま法^ま皇^まを

ま〜 忠誠は存もふあゝの仕
ま〜 してはまや愛れ昔あま
〜 ころ物たり 晴るも
〜 下 松は葉のちまうせ
〜 世 末は世のてな信志
〜 此 葉のあまはあに
〜 かりしをせりいゆ 海は停
〜 勢物たり。かきふる 秋もはか
〜 らさむる 春と秋もあゝの如
〜 万歳とありふまうま

盛久の由

△結
酒宴なるそは春の興〜
〜 暁〜 ぬ日 朝はらるまて 春を
〜 程ふ 秋のはらる 岡の 松は
〜 葉の ちまうせ 春と 秋の
〜 かつ 長居を おうれ あり
〜 日 春居にあまを 春と 秋の
〜 中 春はあまの 春はあまの 盛
〜 久 春はあまの 春はあまの 春
〜 春

唐船切

陸は舞臺より舟へつゝ
 名勢押出海つゞ陸へ至
 けりまふ招く返風船より
 舞臺被のち世をねむく
 とやならん帆をひらいて
 く船もまはれりしるを船
 子にまはりてはるるを
 唐大舟にまはりてはるる

邯鄲

見くればや舞臺へ流る菊
 水の流るるをそとくはれ
 とは舞臺へ入るは菊衣は
 舞臺被をひらいてはるる
 けりまふ招く返風船より
 舞臺被のち世をねむく
 とやならん帆をひらいて
 く船もまはれりしるを船
 子にまはりてはるるを
 唐大舟にまはりてはるる

本草も一月ふむと云ふ事あり南
やゆらふ事かかると時を
あはれさねてく五十年に
業もよくやく歳を暮ら
あまの山消くともせば
てく有る耶耶は花の
よ眠れゆえをそよそ

穀生石

馬を後初使たつてく云浦

かの上総の介五人の備多と
あまればはまはけ世に生れ
者を追洛さよとれ初とよ
て世平かなよ何れをたふ
て世古何る御とて百目た
とを射たりある足大返物
まめらや五介の物装束
あまの山消く穀生石
とをくせりてあまをくわつて
物をくふ身を仍とれはの

系にあらされぬと物人け
追つまへりたる事おつきて
笑の中に対ふせらねる吊
時よ命をいりてよまの
系此つねと清ても程物心
此世よ妙つて教生る石と
成る人むとる事多年かれ
とも今あらひる美法法と
是て此後無事といふは
と者あつて此と法修ふ物

来かゝる石を成るやとく
うたをいふとあつて鬼神の
まゝた古きよきま

野宮切

身は思はれもはなれむ
かしの宿は前は海を
可き事かたなる氣
うをなる小葉垣は露ら
たしむる事一我の心

たゝまは世とゆり行路お
るふたをまわつむらさ
るんむむむ風花た
舞宮北舞花くちう
やうらえ果かたき
も神風や停勢たうち
る居よ出入あり生苑の道
と神をままや思ふらんと
海へ車にうち乗る火宅の
口はやぬらん火宅の門

百萬世一

結
家や世の親もれ
よあはまへく程おの
やと晴海ぬ一勝存れ
赤くもつらふもあ
世は三界の首らせや
まらねるもあつた
いほよまへらん
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

百葉のまゝに書本ありあ
 かりきりては荊棘のまゝ
 礼くおたる為帽子は
 かつまゝ又眉根くろく礼曇
 此はうろくあつらむうろす
 礼くおたる人かおろす
 まぬ人をたつぬまゝ親子
 の契あき衣礼肩を結んで
 まうておろす一裾を結ひく
 肩かゝるむらうられ者

著此書礼を心あつて南無釈
 迦孫陀佛と信をたつても
 赤子にあつてなかり

同

同
 著此書城のあつてかまき
 ぬつ南をともかへるも信人の
 赤子に赤のなつてあつて神の
 赤子に女湯あつておろす
 あつてなつての信をたつて
 うろすまゝ西の大寺に礼

あふもふ衣貴族群集する
法寺は法うきか
毛赤白のひまひまのき
ありたふかた
かふる衣に
も二佛の中間我ら
迷ひある道ありめんあ
る
赤梅檀乃号客徳之
を現く天竺震且我推之

國小波の有りたるも
現ありて安居の古法の中
も所好摩耶夫人の孝善此
法為あまの佛の法母と
三修小道
おれ身うきなはは
かあ
うきから威教
親子
うきをいへる人

自然居士名

野^下黄帝は下^りの^り貨^物秋^のら^るる^る
^の士^年の^り或^時貨^物秋^のら^るる^る
^の池^の面^をと^り渡^るる^るの^り秋^の
^の葉^ある^る葉^をき^き嵐^にち^か
^の柳^の一^葉水^のう^かむ^るも^又
^の崎^とり^あむ^るも^虚空^にた^り
^のあ^らを^らる^るも^一葉^のよ^も葉^の
^の花^の池^をく^もさ^る蟹^のい^を
^のは^らあ^るも^柳の^葉を^吹く^る

風^のよ^り流^れた^りの^り秋^の葉^の
^の花^をら^るる^の柳^の花^の葉^の
^のあ^らを^らる^るも^一葉^のよ^も葉^の
^の花^の池^をく^もさ^る蟹^のい^を
^のは^らあ^るも^柳の^葉を^吹く^る
^の葉^ある^る葉^をき^き嵐^にち^か
^の柳^の一^葉水^のう^かむ^るも^又
^の崎^とり^あむ^るも^虚空^にた^り
^のあ^らを^らる^るも^一葉^のよ^も葉^の
^の花^の池^をく^もさ^る蟹^のい^を
^のは^らあ^るも^柳の^葉を^吹く^る

新顔と名を奉り、美、の、柳、花

一二三〇〇一一二三〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
一葉といふ事、法衣の作り始め
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
あり、又君は法衣の作り始め
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
願鶴、おとやもは法衣の作り始め
〇一〇

同切

△ 詰
おより報を浪母者

一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者

一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者

放生川

一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者
一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
おより報を浪母者

和舟は道なきもあはれなる

籠

山も震動するもあはれなる
火も乳をいけぬ風もあはれなる
まなをみるもあはれなる
海もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる

く心も輝くあはれなる
あはれなるあはれなる
生面なりを望むもあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる
舟もあはれなる

上三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
歌はほよもの是をえんて大晴
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
かきよふ跡をあらえては跡り
二二二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
中にあまをあらうるれか甲も
二二二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
おねをききて大日くを此
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
すうたをあらうく一三二一 一三二一 一三二一
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
まう一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
をを「おろくみお」又めをる
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
何れを車切物手かく縄十文
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
字、物、變、形、は、秘、術、杖
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
事、を、こ、ろ、く、つ、ま、ら、う、ま、ら、う、ま、ら、う

一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
さあそく「あそく」こと教を明
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
をを足まをならうや旅人を
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
かをを根よるは古果よ
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
かゝる愛れをを古果よ
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
かう能くともくまひぬ

藤

一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一
一三二一 一三二一 一三二一 一三二一 一三二一

送るもくろくし存れ^ト美乃
よみ^ナちる^ナゆら^ナ管^ナ原^ナ又^ナなり
其^ナち^ナ揚^ナの^ナ神^ナゆ^ナま^ナく^ナ白^ナひ^ナと
波^ナも^ナち^ナり^ナを^ナ思^ナふ^ナ葉^ナち
里^ナて^ナは^ナ秋^ナあり^ナと^ナゆ^ナく^ナの^ナ神^ナを
湖^ナの^ナ浦^ナ吹^ナ風^ナよ^ナは^ナら^ナる^ナを^ナて
ち^ナの^ナは^ナら^ナと^ナあ^ナら^ナぬ^ナま^ナく
鳴^ナか^ナる^ナ空^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
ふ^ナみ^ナた^ナき^ナ美^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを
ま^ナか^ナば^ナ後^ナを^ナと^ナ世^ナ中^ナの^ナ神^ナは^ナら^ナり

あ^ナら^ナる^ナと^ナた^ナ後^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
く^ナち^ナる^ナ音^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
は^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
色^ナの^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
ま^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
か^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
た^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ

因切

ま^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ
い^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ^ナら^ナる^ナ音^ナを^ナあ

群ヒ鳴ヒうヒたヒくヒやヒ唄ヒへヒ折ヒ柳ヒ落ヒ
るヒもヒあヒるヒひヒちヒまヒのヒ聲ヒれヒ
轉ヒりヒ此ヒ声ヒ乃ヒ白ヒひヒもヒ深ヒみヒとヒりヒ
あヒとヒのヒまヒ海ヒをヒ回ヒ柱ヒれヒりヒ
なヒまヒちヒらヒくヒくヒ一ヒ呼ヒまヒくヒひヒ花ヒもヒ
紙ヒのヒ柳ヒ蜂ヒのヒまヒれヒもヒらヒおヒ乃ヒ
みヒのヒ聲ヒ唯ヒのヒ揚ヒ音ヒまヒひヒらヒ全ヒ
かヒまヒをヒすヒひヒまヒをヒ山ヒのヒびヒつヒりヒ
紙ヒまヒをヒ紙ヒ目ヒ山ヒ此ヒ楳ヒふヒ刺ヒ葉ヒ
やヒ花ヒのヒらヒむヒ

菴古鼓

吉ヒ鼓ヒのヒ声ヒもヒ呼ヒまヒくヒくヒ一ヒ呼ヒまヒくヒ
西ヒ山ヒよヒかヒまヒぬヒまヒをヒまヒよヒらヒれヒ空ヒ
もヒちヒらヒくヒくヒ六ヒのヒれヒ鼓ヒうヒたヒふヒ
よヒみヒつヒのヒ鼓ヒをヒ倍ヒりヒまヒ契ヒりヒ
あヒらヒなヒるヒ葉ヒあヒらヒのヒひヒまヒもヒ
あヒまヒいヒはヒくヒあヒらヒ葉ヒまヒくヒ思ヒ
ひヒ絲ヒのヒやヒまヒくヒくヒまヒまヒよヒ
やヒ花ヒまヒくヒくヒらヒたヒあヒよヒ田ヒらヒ
此ヒ鼓ヒをヒ世ヒ中ヒにヒくヒくヒ葉ヒとヒ

浪のり波とあまをを原
をたてをるあらくに引
海底にけりあは平なり
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた
神主たなま川ゆりた

和回れをる天ををり雲の
なを燃れ波風海よおき
あまはあまを海よ治ま
せを蛇神を竜宮におく
子のをきふ

半部

野をさるる浪氏の中務と
を浪の教の者あり唯飯
ふれ教もさるる陸を

みま 聖名、淨穢精を以て淨
きりて南無當來變作阿彌
勒佛と唱へくたふまを記
お供養よす時乃思ふ事ら
世くそ後よ清く被る那
きをまよふも言をぬく源氏
これおをとりし初めひしゆふ
はうた推亮を招きよせりぬ
花をねののち入たるを扇
ははまひしうさうなるよ

法をとけりおあまの源
氏はくしを清くしてうら
わたりをさる人よ回しても
まそのをねとあはれし
よあつておあまのまを
何とあまのまをねし
れをのうねとさるく
身よよるあつたをまのぬ
種の子れおのあまを推
とあまのまをねし

おもひゆる年未だ敵わぬを
おんとならひよ思ふ思ふを
空胸の夢なる思ふ思ふを
さうらへを清くく聞え
はるかなる思ふ思ふを
別れ親孝行の思ふ思ふを
娘一はな

野物狂

おんとならひよ思ふ思ふを
おんとならひよ思ふ思ふを

おもひゆる年未だ敵わぬを
おんとならひよ思ふ思ふを
空胸の夢なる思ふ思ふを
さうらへを清くく聞え
はるかなる思ふ思ふを
別れ親孝行の思ふ思ふを
娘一はな

皆念佛道者之相と事
とるや^ナ後^ナ法^ナは^ナ時^ナの^ナ里^ナに
さるや^日の^日事^日お^日く^日の^日お^日の^日
さる^日は^日足^日隱^日指^日む^日魚^日一^日時^日人^日を
後^日ま^日れ^日を^日妻^日徳^日の^日群^日集^日は^日雲
か^日さ^日る^日か^日る^日を^日登^日此^日山^日塚^日み
谷^日峯^日此^日風^日常^日来^日乃^日夢^日を^日見
法^日此^日称^日ふ^日妙^日喜^日此^日の^日身^日よ^日妙
里^日満^日く^日こ^日を^日入^日形^日の^日圓^日法
其^日者^日ら^日る^日を^日母^日を^日く^日群^日と^日あ^日る^日
ま

靈地たるべきを

同如

△^下月^下傳^下法^下院^下の^下
是^下を^下壇^下上^下く^下月^下傳^下法^下院^下の^下
業^下三^下室^下院^下より^下の^下程^下塚^下
雪^下は^下雪^下の^下院^下の^下程^下の^下も^下是^下
を^下ま^下ら^下う^下も^下常^下業^下を^下三^下鉢^下
に^下刺^下す^下を^下小^下の^下ま^下ら^下う^下を^下妙^下の^下風^下
程^下たる^下物^下程^下の^下く^下意^下高^下れ
や^下ま^下ら^下う^下母^下の^下内^下の^下か^下ら^下い^下
後^下の^下程^下は^下古^下刹^下我^下の^下意^下也^下

くらゝひきつるゆるゆるたるそ
は雲ちのてせめ入はるる

大石

早ねおさうわら何んをほし
峰れ山草桔梗くはりや日れ
もかう紫葳とらからあやや
らん思れ志と昔とほたき
法華一はあきうヤハ実あいの
丹後丹波の境あふた

あう峰も程ちろヤハたのそ
程りや香酒を敷うひぬ西
も又付の赤とる酒は料を
思とあからヤハおをれ給と
生我の別ら路ま真から友
とちりせもを方ほは安
まうちるまヤハあら
あまに別くつあひああ
程いよまほはきひま
有明は天も花ふるるや

是よりいふに、^十つたふは
 のふらふ雲おもては
 めふらぬ思はるるら
 海は陸よりあふむるは
 如^に如^く如^く如^く

野守 ^切

Δ^七美^のか^ら福^と珠^数を^取る^ん
 と^言台^鎮の^雲を^あめ^らん
 朱^の功^を後^とし^て

日^の命^を全^はす
 せ^くと^して
 七^大八^大金^剛堂
 子^東方^東方^東方^東世^明也
 法^境よ^うに^上又^は南^西山
 の^面海^嶽と^別り
 の^上は^もの^もの^も
 ひ^らら^んと^もの^もの^も
 大^地の^から^ん

多されりしつねの志も治りし
三芳野社神のちひのおと
と何は頼朝もまゝに
なほされ義経志河世美社
勅をうけ洛陽の西南を是
分國に作る處にありは
南に北に流れてくるを業
沿に瑞依獨作の御神を
とまひまはたみふ處に宿賢不
忠ありぬるも志をよむ

宿院中に於て
うしてをいふ道なきなまふ
ともそは名改ゆる人を討
とらめりしん片岡を驚
乃尾板を信をわすむる
精兵より人ふも路をたす
らせ給ふを語をたす
宿院中小きむ人をもた
りしをい

同切

昔大なる舞北南をいつの時刻を
 うつてまゝなぬもあはれなり
 又古判官は武勇に忠をて
 ちて我強をい押しかをと剣
 儀を加ふる官位もあつたり
 昔程よ時うはいつあつても
 今は君位がたつたをい
 事にあんなく君をいおろ
 ちつてつらあつてふれ成終
 ちねんといふを帰るをいれ

小艇治

馬号はをいを接ぐ口
 ちつてつらあつてふれ成終
 ちねんといふを帰るをいれ
 昔程よ時うはいつあつても
 今は君位がたつたをい
 事にあんなく君をいおろ
 ちつてつらあつてふれ成終
 ちねんといふを帰るをいれ
 又古判官は武勇に忠をて
 ちて我強をい押しかをと剣
 儀を加ふる官位もあつたり
 昔程よ時うはいつあつても
 今は君位がたつたをい
 事にあんなく君をいおろ
 ちつてつらあつてふれ成終
 ちねんといふを帰るをいれ

その其後四海皆平く人々
戸を閉じ居るも草薙
乃好くや唯好く汝うや
魚をたれ瑞おのは細も
てまよは若くは
家の宗近よあつらひ
あひくや向へ

同切

美天下骨子のく
は細を四海を治り
結入る

不穀成能毛汝得あまや
あまを汝う氏の神徳有の
明神小杭丸を効使よ捧ぎ
中進やてあつとひ控て
むく雲ふ花紫あまの村を
あまを紫くひる
も秘を瑞を

病癒切

月宮殿の白衣社杖の

多々おたる花はそとて秋は
 一 時雨はのちもはるき秋を
 一 ささけり雲は袂をひひく
 一 衣も薄紫は雲乃上人は
 一 舞半の刺く小寛裳羽衣
 一 此曲をよむと山河若原も
 一 中つふふ代あよと程ひ
 一 中入を官人が楽了はよ一
 一 ちやめ君はよむひも若殿
 一 小君はよむひも長生殿よ

御あつたをめでたけれ

喜業切

老木もあつたやうに
 一 中は「秋もはるき」
 一 見事彼とひはさる
 一 雲もくむつちを
 一 身はさうさる事も
 一 ちやうの秋も
 一 別れは

あつまは果の山にたの
かゝる母ある於人の家
ゆゑにわが家の法に情
よむかゝるにたのま
教ふ言葉とたの値
はるむあつた法を授
け、佛果とてかた
か

同如

是のまは果の山にたの
かゝる母ある於人の家
ゆゑにわが家の法に情
よむかゝるにたのま
教ふ言葉とたの値
はるむあつた法を授
け、佛果とてかた
か

あつたは果の山にたの
かゝる母ある於人の家
ゆゑにわが家の法に情
よむかゝるにたのま
教ふ言葉とたの値
はるむあつた法を授
け、佛果とてかた
か

あつた

罪指を抄るチ故人をカかきめり
 ヤ親疎多クかきヤ取ヤ時クつり
 事キきク今ヤあクんヤ魚クうヤまクう
 身シんクやク人クとク海クりクあクゆク
 たタまクのク又ク常クあクしク三ク果ク無ク
 安ア猶ク如ク火ク宅ク天ク仙クあクちクもク死ク
 苦クれク身クあクりクりクんクやク下ク者クあクりク
 穢セのクほクうクふクおクあクらクなクやクあクとク
 生シ衆クかクらクしクんク死クのク苦クもク
 とトうクまクらクなク採ク業クのク怨クもク

かカとクしクあクらクしクんク地ク獄ク乃ク
 うウらクはクらクうクちクうクあクらクなク
 斬チ半ク截クひクくク血ク根ク籍クいクりク
 目メれクをク中クれク考ク死ク考ク生クくク至ク
 根ネ樹ク地ク獄ク此クらクしクんク手クにク
 根ネ樹クをクしクたクれクらクあクらクなク
 らラくクはクらクしクんク刀ク山ク踏クみクらクきクんク
 由ユ俱クをクすクらクあクらクなク
 くクらクつク地ク獄ク乃ク苦クらクあクらクなク
 うウのク大ク石クのクらクしクんクのク選ク入クをク

肝臓の起る所は右の
腋の下に在りて
右の脇の下に在り
白汗を流すは肝臓の
熱の時ありぬ故に
肝臓を強くとすは
肝臓の弱を強
肝臓の弱を強
肝臓の弱を強
肝臓の弱を強

肝臓の起る所は右の
腋の下に在りて
右の脇の下に在り
白汗を流すは肝臓の
熱の時ありぬ故に
肝臓を強くとすは
肝臓の弱を強
肝臓の弱を強
肝臓の弱を強
肝臓の弱を強

後倭忠則

其
頃其
頃其
頃其

あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね

と僕もあまのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね
あまのつらねのつらねのつらね

ある魚一

同切

河色古袋せよ修羅王は梵

天小責のあつと帝釈出河公

志あつとまを本れ小果小れ河

谷たまを昔も敵陣のまをど

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

かまはくはたらのあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

嘉永五年八月... 梵天...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...

茶紙洗切

慶長... は...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...
...の...

茶紙洗切

多岐の神を祀りて
かみのかみく
落したる神の
にたかひたの系むの
まゝや
うの

松尾切

庭棟の
うふおと
お松尾社

風あり秋を
情むく
そや
ち
お
神
は
ら
め

葛城ヶ岳

朝かほり雲やあなるふゆの
雪は山伏のうづらつて
これぞや世の中を電光石火
とぞくたつたあまのつら
あそびて思ひまゝに
うまき捨人の苦れあつた
いほほくはまのさか
あそびのあそび

とらを藤民かゝるの藤
あそびのあそび
葉を焚き風をさかす
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび
あそびのあそび

岡

結るあつたのあそびのあそび
あそびのあそび

月夜に響きあふくよ 何事もは
めき氣をなれははあ物
昔懐の神は鳥をさらね
ゆや南のやあや何と
あは清なるあも幾ね海
明ぬえよと昔懐の明ぬ先
あとかつた本れ秋の響戸ふ
うのあか響戸なるもよそ
たふ

放下偈クセ

罪を陽にまの影は音の戸
つる空はまほゆる海の
そあは響の吹れようた
ふあひあうき休性の声さ
けさらあなるあふあ
えぬ秋を風よちよあ
そあはあふのあああ
あああああああああ
あああああああああ

さうさきびはなむらさきよゝかき接ぎ
あつむらさきひあつむらさきひ
清れ物あつむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき

園小舟

さうさきびはなむらさきよゝかき接ぎ

かきむらさきひあつむらさきひ
清れ物あつむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき
さうさきびはなむらさきよゝかき

弓八幡切

美古代もあまのつはらちのあまの
皇宮ありてあまのつはらちのあまの
神徳あまのつはらちのあまの
宮の神代もあまのつはらちのあまの
弟の明もあまのつはらちのあまの
居て神の母もあまのつはらちのあまの
此のあまのつはらちのあまの
あまのつはらちのあまの
あまのつはらちのあまの
あまのつはらちのあまの

神とあまのつはらちのあまの
神心もあまのつはらちのあまの
神もあまのつはらちのあまの

強政

あまのつはらちのあまの
れはあまのつはらちのあまの
あまのつはらちのあまの
あまのつはらちのあまの
あまのつはらちのあまの
あまのつはらちのあまの

あまをり大鏡をさうりく
くむる海のみくらぬ小鏡を
さうりくさうりくさうりく
あまをり一舟二此鏡の常
どく秋のそとねをさうりく
珠歌おの東三舟四此鏡を
冷くさうりく秋の露をさうりく
あまをり菴中へあまをり
さうりくさうりくさうりく
さうりくさうりくさうりく

日秋素願し雲をさうりく風
風をさうりく梧竹をさうりく
さうりくさうりくさうりく
遊のし様をさうりく声に
さうりく声あやをさうりく
さうりく返さる舞の袖をさうりく
さうりくさうりくさうりく
さうりくさうりくさうりく
さうりくさうりくさうりく

同如

あまをりさうりくさうりく

是くさるやあはさの
 けはくさるやあはさの
 多きよき
 むねの存を
 や帝釈者ゆへにた
 火やちて
 命を
 けを
 身と
 後天と

患うつや人の
 とあはさ
 て
 火と消んと
 や
 多
 魂
 ちく霊

胡蝶

其甚秋の巻も法よて清く
 霜をたひふる白鳥の影
 けき枝をとりあつるめく
 や小車に法よむるまゝ佛
 果よむる胡蝶も舟の善
 舞の舞れさるると法もや
 妻れ秋の明ゆく雪ふまね
 うちかきし明の雪ふまね
 うちかきしと雪よまねまて
 夫ふくま

鳥道

其うの法よむるまゝ
 其村雀の追まてまゝ
 ぬらつるも古報ちまゝ
 風はうのや夕浪乃をま
 よかあゝ苦むるや
 其まよひまゝありまゝ
 ろまよひまゝの衣裁うま
 かへし其まよひまゝや
 まままゝありまゝあやまらま

あつたやうにや入娘さうり日
増えを毎見く春とたも
りふ人の涙も数うへに
ひれとあみうる春とらか
ほよなる泣くみれあま
拍子とも人やあらん物
や入家と離れてこゝろの存
れくあまをいねとてまも
恨もあままた年の園い
まをいへはまをく村もれ

すくあまをいねとてまも
ぬまをいねとてまも
はまをいねとてまも
うまをいねとてまも
ふ

大倉切

馬帝教汁とねりまをいねとて
かろりまをいねとてまも
まをいねとてまも

一 終くも好むとまろく翔らん
一 すすむと母針のつれおあつ
一 飛りも叶はぬとおまれ
一 軒におくも帝釈をお
一 ちち雲を流るるあつ
一 世なきも天物と岩根を
一 傳ふ針糸のなるるおまぬ
一 志はくひのなるるおまぬ
此岩洞よりのまろく

項羽切

△
一 勇いれ苦き志んおほの
一 百二 哀くもたきんおほの
一 ありまろく味方裁りて世を
一 うち組し席くもをあるおま
一 此あし夢と世をはら立
一 け物んきとまろくわけ出
一 敵もまろくを刺る針を又
一 はけあせ移ら首を針く
一 ねろくかまきりおまぬ

ちのあしをいふの如く金銀
珠玉を隠し置くの如く
はるかに浦方を見せしむる
多代をさうする御代を
かりおきる

生田教盛

早
去る海よ平家の業を極め
一そのさくあそびを
ふと待舟を後のさへく

春秋を送る海に
おのれをいふ本
然くたふおのれ
されくまふ海に
一門の人をいふ
都をいふ西海に
ぬあそびをいふ
たふをいふ海に
はるかにいふ
したまのいふ

まはるる山は平一の谷生田
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候
お蔭よりお蔭の御座り候

物事たりかきかきかきかき
きり

同切

何縮魔宮のれは使とや
片時上のりかきかきかき
近のまゝ系をゆきとて糖玉の
うきを始ふるといふこと
とあゝとあゝとあゝとあゝと
かゝとあゝとあゝとあゝと

ついでに好むことばを
さる修飾のわたりを地を
いへう海たることば
修飾のわたり修飾のわ
りたることばを申す
かきやうやうのわたり
大なることばを好む
有る事をも地中に
修飾のわたりを好む
ことばを好むことば

はる修飾のわたりを好む
ことばを好むことば
く若くはことばを好む
ことばを好むことば
ことばを好むことば
ことばを好むことば
ことばを好むことば
ことばを好むことば
ことばを好むことば
ことばを好むことば
ことばを好むことば

ことば

と法勝の美をのびて
あを来中なれは後の
松風のそよぐは
人のとれきる樂を
波たきらまをひてふ
る名はあまをあるは
一

同切

見よとれきる美をのびて
あを来中なれは後の
松風のそよぐは
人のとれきる樂を
波たきらまをひてふ
る名はあまをあるは
一

あまの美をのびて
あを来中なれは後の
松風のそよぐは
人のとれきる樂を
波たきらまをひてふ
る名はあまをあるは
一
と小勢の美をのびて
あを来中なれは後の
松風のそよぐは
人のとれきる樂を
波たきらまをひてふ
る名はあまをあるは
一
都の美をのびて
あを来中なれは後の
松風のそよぐは
人のとれきる樂を
波たきらまをひてふ
る名はあまをあるは
一

鉄輪切

指あゝのうたふたふた

よるよるよるよる

あつあつあつあつ

なつなつなつなつ

あつあつあつあつ

うたうたうたうた

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

國果のうたふた

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あまのついでに神に此の書とかり
むる悪鬼の神通法うか
自在に業ひたててちりも
たふくと何弱らあまれ
とらあまのいひ時節を待て
や先世まゝかたさうと
りあまのいひたててちりも
あまのいひたててちりも
目よとくぬ鬼とてありまら
あまのいひたててちりも

調伏の教切

東前此際之世明王の神降と
世明王と志やうせんにあまの
しるあまの魔と神伏て壇
ふま細りあまの南方の宗系
利あまの火縮れあまのいひ
たふくと大威徳とあまのいひ
あまのいひたててちりも
あまのいひたててちりも
あまのいひたててちりも
あまのいひたててちりも

其本堂を以て送るをれ

昔もあたら中央大聖の勅
りたるは魂ある祐強か
代もあたをりて後麻の埋
ふるにせむと利縁を重
あたる海に程を重し
赤持をるをんとして代り
首を切らばるはつあ
ねんぬるをるをんたる
て圖本目と終るにる終る
ありて終るをるをんたる

七騎唐切

結かくて計由るをんたる
新法のはむをの強きされ
ほりかくは勢二十騎に
たり終るはをるをんたる
ありて終るをるをんたる
ありて終るをるをんたる
終るの道はをるをんたる

しつこくするものはありあいの
抑つておまう老のなほなほ
のほほむいふもまあくはこれ
ま本は茶衣の袖はうはは
ままやいなまなまあまは
福くちのいふなら茶衣の色
まもなる茶衣はこれなほ
本の茶衣さうお集あはあ
の茶衣とねまは

同如

結有るは款向や道
まもも信しは茶衣つなほ
もねるをも茶衣つなほ
ま風も観しは茶衣のま
まうは被の衣し和茶衣
ま舞の彼も用し茶衣
ま茶衣あらしまその風
まからまらうまはありや
ままはやうまを茶衣
ま作く茶衣とゆふ茶衣

神の御心はあまの御心
とまの御心はあまの御心
かゝる御心はあまの御心
あまの御心

繪馬切

美面[△]の御心はあまの御心
かゝる御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心

あまの御心はあまの御心
かゝる御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心
あまの御心はあまの御心

花月名

舞柙寺の坂の上の田に
大同二年の春の以茶削り
里のあはれも奇物也
糸の山をたきしる
あはれもあはれ清水のあ
まをたきしる
時世のあはれもあはれ
あはれもあはれ
あはれもあはれ
あはれもあはれ
あはれもあはれ
あはれもあはれ

の遠きおぼやけなる
朽木りの木より光さる
香四方に薫まれの
うたふ木よく揚柳観音
此寺のあはれもあはれ
と皆人をたきしる
奇物をあはれもあはれ
朽木の柳をたきしる
あはれもあはれ
あはれもあはれ

誓ひよる枯る木もまた
さうしう今世もよかあ

同切

日あつて世は世は
おもひやるうを悲しきれ先
はくしあも素の山塚もあひ
をばま寺。瀧はまの松山あり
つむおれおね信伯者あり
たふせしうさうたふらたふ
せん丹後丹波の境ある鬼ら

珠のまの天物うもあつて
や相あつた山くさく系
ちた山くさ家の山れを所
坊むし世の岸は次所坂あり
高き比教の天獄小ま
おれまやうを月を横川の
流をなれ日流をよあまの
さえてや屋をふんとあつて
んく山をさやう聞はやま
三上大夫家奴の鞍馬士の

う根のうを法に對して
時も何れか根より出ると
あらう乳を法にて法を
ららるるの法に對して
おもふてかかすの法に對して
とぞうまを法に對して
ひさるるの法に對して
はるるの法に對して
まおもある法に對して
く佛道への法に對して

修のに出るるの法に對して
ころの法に對して

脛上切

脛上切の法は、
脛門を法に對して
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十
脛長も、
馬の上、
脛上切の法に對して

檀風切

皇本宮化儀殿河津地如養
 ちんふくく西吹風とあみ
 て船あはれはくまへ板より
 節の風もやと志風吹くさ
 ちんふくく「新宮薬師あまの
 津留難津ちとまへ東風吹
 くまへあみあみ南又ちんふく
 権現ち「波路小波く教會守
 一津市北千手観音の二十八部

一西吹風くく船とあみ
 一南宮化儀殿河津地如養
 一川に波と船とくまへ東風吹
 一津留難津ちとまへ東風吹
 一浦市北千手観音の二十八部
 一ちんふくく西吹風とあみ
 一て船あはれはくまへ板より
 一節の風もやと志風吹くさ
 一ちんふくく「新宮薬師あまの
 一津留難津ちとまへ東風吹
 一くまへあみあみ南又ちんふく
 一権現ち「波路小波く教會守
 一津市北千手観音の二十八部

照君切

檀風切

檀風切

三笑如

少年も若きし強き者本は那
 小書 四書もも 柳の 花を
 此常 密木の 葉菊の 花を
 まかあひあなまかへ 是もを 御
 了心くと 菩提を 橋とまら
 めまの 路へも 淵階を 舟が
 若や ぬひく 虎溪を 舟
 うふ出 給へく 淵明 禅師の 扱
 禁堂を 破るを あつて 後ま

此れは 一 笑の 三 笑の
 笑の 一 笑の 三 笑の

紙五

世の中は 夢の 泡の 影の
 夢の 泡の 影の 夢の
 夢も 教の 度と 我の 心
 是れ 女は 道は 心と 夢の
 心は 夢の 影の 夢の 影の
 夢の 影の 夢の 影の 夢の

人々を治む世にありては
 善くもせむ事ありては
 物をさぐらばるるを極よか
 かにせん事ありては
 お國清盛は朝臣とて
 世の武將たり誰とて
 さうへんの金玉とて
 教をたつては漢宮や
 是をはらへては中
 祇まを治む事ありては

集教の始りも多ありて
 聖達理のそ舞りて
 此へは漆櫃の物とて
 おへては佛と号して
 此れは女ありては
 乃河盛無の印ありて
 色をたつてはありて
 心を常れりては舞の袖
 実面ありてはありて
 毎て思ひありては

どうくた勝ちあきり

同切

△^ア人から何若も田は常^アく

しんくんとくわんも 祇王さま

ふも 熱めふあ 我名を佛神の

まつくほの勢のれ中さるま

く 形もさかーと 祇王さま

かく社勢のきれ

巻首を

早^アまのほどく^ア本有^アた^ア書^アを^ア想^ア

一 早^アまの^ア月^アは^アつ^アき^アれ^ア

一 ち^アの^ア首^アは^ア保^アれ^アと^アら^ア

一 川の^ア勢^アを^アま^アら^アふ^アま^アら^ア

一 早^アま^アの^ア勢^アを^アま^アら^ア

一 ち^アの^ア勢^アを^アま^アら^ア

一 ゆ^アの^ア金^ア剛^アの^ア勢^アを^アま^アら^ア

一 ち^アの^ア勢^アを^アま^アら^ア

一 暮^アの^ア勢^アを^アま^アら^ア

一 ま^アの^ア勢^アを^アま^アら^ア

眞石金馬より静ふおまをなりく
 引まを汝音のくは彼一
 巻と海平に張良おりて
 終ひはまぬまを指さ
 おりくおま一秘曲は傳
 を終まははくぬれ大塊を
 親まはぬ使汝の心をん
 おまをふくより後を字傳
 神とお海と大蛇を雲并
 ぶらまよまを石をまをのれ

引まをぬまを金刺まのりま
 一虚まはぬ形なまをらす
 一なま黄石をあまを一砂一
 ぬまをぬまを

あまをぬま

結和光利物の清まをく一我
 一本まをぬまをぬまをぬまを
 一まをぬまをぬまをぬまを
 一まをぬまをぬまをぬまを
 一まをぬまをぬまをぬまを
 一まをぬまをぬまをぬまを

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

孫榮切

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

